



《ご案内》

お知らせ！

本部新展示室『考古資料展示室』オープン！

しばらくの間休館していました本部展示室をリニューアルし、『考古資料展示室』として7月10日（月）にオープンしました。発掘調査や整理作業の流れを発掘・整理道具や写真・解説パネル等を用いて具体的に説明した常設展、今回の遺跡発表会で発表の4遺跡の遺物を展示した企画展「最新出土考古資料展」を開催しているほか、過去に出土した多数の遺物の中から印旛地区を代表する「人頭形土製品」と「ムササビ形埴輪」の2つの遺物も展示しています。また、展示室に設置した窓から整理作業の様子を見ることができるようになり、皆さんに当センターの活動をわかりやすく紹介しています。一度足を運んで印旛地区で生活していた人々の歴史と文化を肌で感じてみてはいかがでしょうか。



考古資料展示室

『四街道事務所考古資料館』休館

四街道事務所の一時間閉鎖に伴い、『考古資料館』も3月31日をもって休館しました。

《発掘中の遺跡》  
7～9月予定

がんばっています！

成田市

下金山城跡（中・近世）

佐倉市

先崎西原遺跡（縄文～奈良・平安時代）



先崎西原遺跡

むつぎきふねだいら  
六崎貴舟台遺跡第8次（弥生時代、中・近世）

四街道市

出口遺跡（古墳～奈良・平安時代）

印西市

駒形北遺跡第2地点（古墳～奈良・平安時代）  
大久保遺跡第2・3地点（古墳～奈良・平安時代）

酒々井町

上本佐倉上宿遺跡第4次（平安時代、中・近世）

富里町

獅子穴 遺跡（旧石器、古墳時代、近世）

栄町

大畑 遺跡（縄文時代）

本埜村

龍腹寺裏遺跡（旧石器、縄文時代）

《室内作業》

こっちもやっています！

本部

佐倉市錦木町198-3 ☎043(484)0126

先崎西原遺跡（佐倉市、縄文～奈良・平安時代）

下勝田殿台東・天辺松向遺跡（佐倉市、縄文時代）

権現堂遺跡（四街道市、古墳時代～中世）

南作遺跡（四街道市、縄文～奈良・平安時代）

浮矢遺跡（四街道市、奈良・平安時代）



土器水洗作業

成田事務所

成田市飯仲字台畑330-1 ☎0476(26)7208

川栗館跡（成田市、古墳～奈良・平安時代、中世）

宮本宮後遺跡B地区（佐倉市、古墳～奈良・平安時代）

郷野遺跡（四街道市、弥生～奈良・平安時代、中世）

弥富事務所

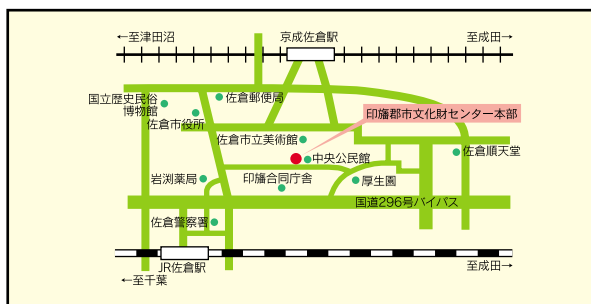
佐倉市岩富町538-1 ☎043(498)2735

宮内井戸作遺跡（佐倉市、縄文時代他）

《おしらせ》

上記の発掘現場、室内作業は見学できます。ご期待に添えない場合もありますので、かならず、事前にご連絡下さい。詳細は本部へお問い合わせを！

本誌は、年4回発行の計画です。第6号は10月発行の予定です。今号のご意見などをお聞かせ下さい。



平成12年7月15日 043-485-9871 043-484-1264 043-484-1264 千葉県佐倉市錦木町198-3 〒285-0025 千葉県佐倉市錦木町198-3 財団法人 印旛郡市文化財センター 発行・編集 財団法人 印旛郡市文化財センター



うちだ はやまこし  
佐倉市内田端山越遺跡



旧石器出土状況

去年発行したフィールドブックvol.2の表紙で奈良・平安時代の香炉形の土器と「寺」と刻書された埴輪を紹介した佐倉市の内田端山越遺跡の再登場です。今回は、今から約1万4、5千年位前の旧石器時代に使われた石器の紹介です。



石器が出土した場所は香炉形土器や「寺」の埴輪が出土した住居跡と同じ地区で、3ヶ所の石器集中地点があり、石器が含まれていた土層は、関東ローム（立川ローム）の上面から約30cmの深さの間でした。上の写真は石器集中地点の出土状況です。出土した石器の数は約650点で、ほとんどが黒曜石製です。また、3ヶ所のうち2ヶ所では石器を作ったらしく、出土石器の主なものは石器製作途中で生じた剥片や碎片という大小の破片です。

特徴のある石器は左の写真のような槍先につけた尖頭器です。この尖頭器は元の石（石核）から打ち離れた面（裏面）はそのまま、片面（表面）だけの加工で形を整えています。裏面を加工していないので、側面から見ると彎曲したままなのが分かります。このような特徴を持つ尖頭器が10点ちかく出土しています。

ちなみに、写真の尖頭器は透明度の高い黒曜石なので赤のバックライトが透けて見えています。（長さ4.86cm）

# 佐倉市内田端山越遺跡

平成12年4月から5月にかけての調査で、平安時代(9世紀前葉から中葉頃)の規則的に並んだ竪穴住居跡と掘立柱建物群が検出されました。上空から撮った写真を見てわかるように、縦(南北)横(東西)に棟の方向を揃えた掘立柱建物跡が住居跡を囲むように並び、住居跡どうしそれぞれが適当な距離をもって規則正しく並んでいます。しかし、細かく見ると住居跡と掘立柱建物跡が重複していたり、住居跡どうしの距離が近すぎたり、東西南北のどちらにも向きが合わない掘立柱建物跡があることなどから、これらが同時にあったものではないことがわかります。

さて、こうした遺構からいくつか注目すべき遺物が出土しました。写真1は、9世紀前葉の住居跡(5号住居跡)から出土した「置きカマド」です。写真2のように、他の遺物とともに床面から割れた状態で出しました。置きカマドは住居の壁に作り付けられたカマドと違い、持ち運びができるいわば可動式のカマドです。これは村で行われる収穫祭などの各種祭礼の時や、仏僧が来た時などの炊き出しに使われたと考えられています。印旛郡市内では成田市小菅天神台遺跡(1点)、同野毛平木戸下遺跡(1点)、同大室十三塚(2点)、佐倉市高岡大山遺跡(1

点)に続いて5例目です。おもしろいことに須恵器甕と同様の作り方で作られています。また、同じ住居跡からは硯が3点出しました。須恵器の胴部破片を再利用したもの(転用硯)1点と、最初から硯を目的として作られたもの2点です。いずれも墨汁が明瞭に残っています。

この他、銅製の「巡方」と呼ばれる身分の高い人が身に着けた腰帯の装飾が出土した住居跡(7号住居跡)や、「山」と墨書された土器が出土した住居跡(4号住居跡)もあります。

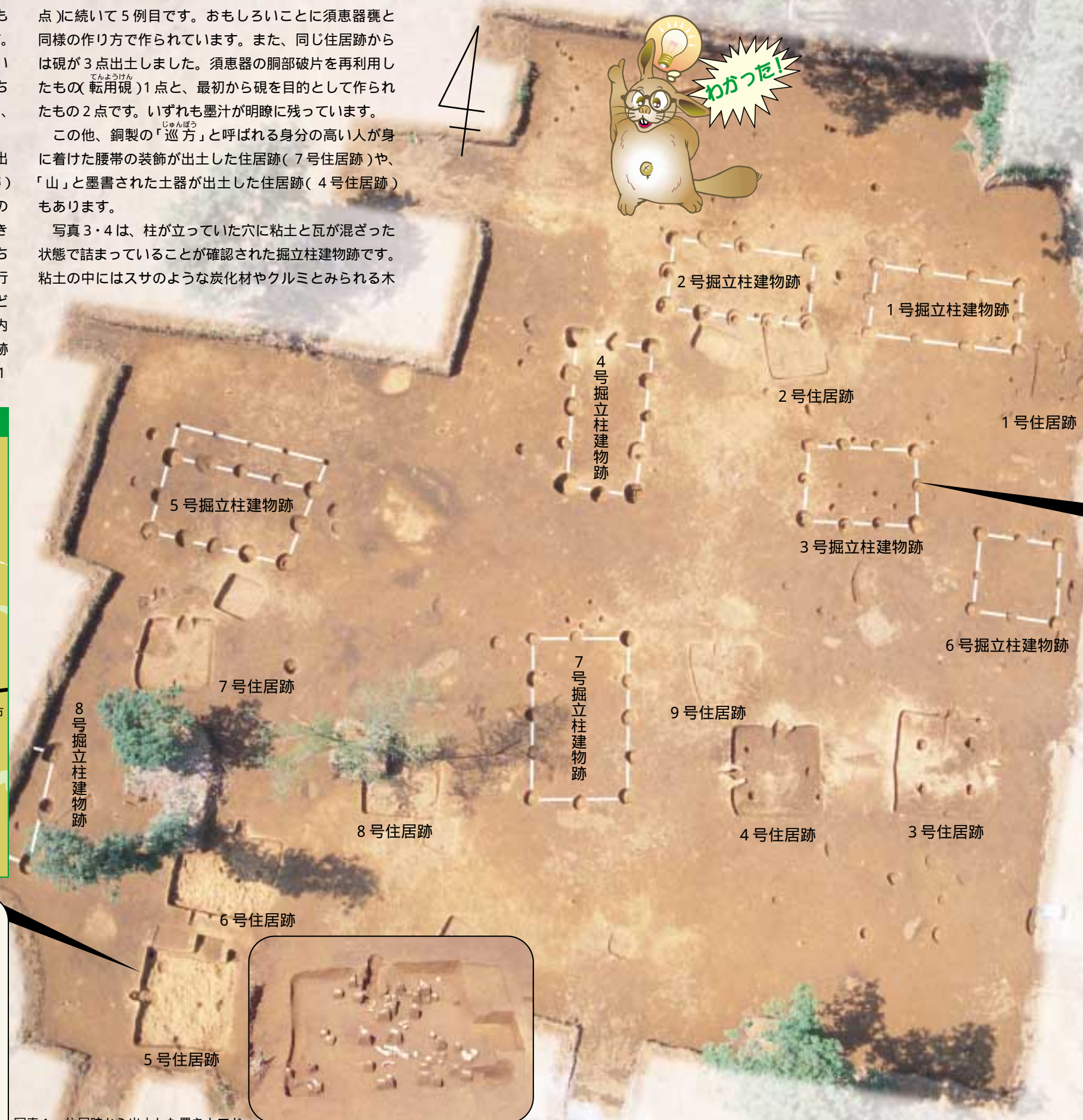
写真3・4は、柱が立っていた穴に粘土と瓦が混ざった状態で詰まっていることが確認された掘立柱建物跡です。粘土の中にはスサのような炭化材やクルミとみられる木



写真1. 住居跡から出た置きカマド (高さ約47cm、焚き口底径約46cm、掛け口孔内径約19cm)



写真2. 床面に散らばって出た置きカマド



の炭化物も確認されました。このことから、ここに瓦葺きの建物が存在した可能性が十分に考えられますが、瓦の量から判断する限りでは総瓦葺きではなく、屋根のごく一部に葺かれていたと考えられます。出土した瓦には平瓦と丸瓦がありますが、なかには内側に布目が見られるものもあります(写真5)。作りを観察すると、瓦を作り慣れたいわば瓦作り専門の手(瓦工人)によるものと、そうではない人によるものとの2種類あることが認められます。このほか、瓦は住居跡のカマドや床面、堆積土の中からも出しました。

今回紹介した地区は、2号で紹介した「寺」の刻書土器や香炉といった仏具や仏教関連の遺物が出土した地区とは、直線距離にして300mも離れていません。掘立柱建物群は周辺で収穫された農作物などを納めた倉庫群と考えられ、この地区が村の中心部であったと考えられます。



写真3. 柱痕が明瞭な掘立柱建物跡



写真4. 柱穴に落ち込んだ粘土塊



写真5. 住居跡から出た瓦 (布目のほか幅2cm~3cmの粘土紐を巻き上げて作った痕跡もみられる。)